

二〇一三年七月二日

苔の花咲く滝口のさざれ石
奥院へ瀬音を辿る径涼し
草いきれ獣道めく郷の道

きづな
こすもす
うつぎ

二〇一三年七月一日

水音の間遠にひびく宮涼し
皺多き鵜匠の顔や火の粉舞ふ

きづな
なつき

二〇一三年七月一日

縄暖簾ナイター帰り族で混む
木道の行く手に立ちし雲の峰
冷奴十字十字と切りにけり
万緑の里へ傾く電車かな

宏 虎
はく子
菜々
よし子

二〇一三年七月九日

緑陰をトラックが占む亭午かな
梅雨空へコンビナートの炎燃ゆ
ころころと玉あそばせてラムネ飲む

有 香
こすもす
ともえ

二〇一三年七月八日

水鉄砲出会ひ頭に打たれけり

宏 虎

二〇一三年七月七日

湯ほてりに風心地よし夕端居
磯遊び小等の喚声何ならむ
老眼鏡かけたるままに昼寝覚
逆上がりできますように星祭る
妻のメモ水羊羹は冷蔵庫
夕涼の鴨川堤吟行す

ひかり
あさこ
さつき
有 香
雅 流
満 天

二〇一三年七月六日

梅雨最中山と積まるる願い石
無農薬旗ひるがへる植田かな
トンネルを抜くるや窓に青田風
と見る間に舟虫四散して失せる

菜々
さつき
きづな
宏 虎

毎日句会みのる選・二〇一三年七月一五日